



風狂・滝 瓢水① 地域史研究者 三善貞司

放蕩を重ねた、なにわの俳人

常識を超えた中にも味わい深い句

風狂とは風雅・文芸に凝って、常識を失った人のことです。滝瓢水は奇行を重ねたあげく家屋を失い、大坂で客死した異色の俳人で、風狂の申し子だと言われています。こんな生涯を皆さんはどう思われるでしょうか。

瓢水は貞享^{ていこう}1年（1684）加古川（兵庫県南東部）の別府村^{べふむら}の^{おおたな}大店「叶屋^{かのつや}」のあととり息子に生まれました。幼名新之丞^{しんじゆう}。叶屋は彼の曾祖父の滝新右衛門元春が設立した海運業の大店で、父三代新右衛門清春は叶屋当主。母のお参^{まゐ}は旧家の令嬢で外出はかごばかり、自分の足で歩いたことがなかったそうです。なにしろ千石船が五艘^{ごそう}もあり、なにもしなくてもお金がたまって困るといって結構なご身分でした。

ところが不幸なことに元禄4年（1691）父政清は病死、新之丞が四代新右衛門有恒^{ありつね}と名を改め叶屋の当主になります。名前はいかめしいもののまだ7歳。店は父の父（つまり祖父）の二代新右衛門清春がきりまわし、有恒は母お参に溺愛されて育ちます。幸い優れた番頭や手代も多く、叶屋の経営は順調、なにひとつ不自由なことはありませんでした。

祖父清春はわしの目が黒いうちはいいが、もう年だ、お前がすっかり商いのこつを覚えねばならぬと口やかましく言いますが、甘やかされた有恒は、聞く耳を持たぬ。家業に身をいれず、母の実家の兄で国学者の福田貞斎に師事し、学問と俳諧に夢中になります。

元禄16年（1703）には俳人井上千山に認められ、千山の撰集『当座弘』に入集するほど腕をあげます。

千山は芭蕉の高弟広瀬惟然^{いぜん}の愛弟子です。惟然は芭蕉から笠と蓑^{みの}を与えられ宝物にしています。亡くなる時私の形見だと千山に贈ります。千山は有恒が大変気に入り、わしの俳風を継ぐ者は汝だと、その大事な笠と蓑を渡します。ということは有恒が芭蕉直伝の俳人としての地位を、世間から承認されたことになります。

すっかり天狗になった有恒は俳号を瓢水と定め、俳諧一筋に生きると店をとびだし、諸国を気ままに歩く旅に出ました。まだはたちの若者ですから無分別、おまけに金はくさるほどあるから、京や大坂で豪遊します。京の鳥原の遊郭で遊女が香をたくのを見て、「おれもたいてやる」と火鉢の上に財布を広げたから、小判や金銀の小粒がジャラジャラと音を立てて火中に転がりこんだとか、「今日は季節はずれの節分や。豆まきしよう」と一分銀をとりだし、座敷・廊下から庭先まで撒いて廻り、遊女たちがキヤーキヤー叫んで拾うのを、眺めて喜んだなどの逸話が残っています。

とにかく学識がない。江戸へ下る途中親子づれの物もらいと会い、幼児を抱きしめて泣ながらに身の上話しを語る父親に感動し、所持していた大金を残らず渡します。次の宿場に着いて為替（ここでは故郷からの送金）を待ちながら宿場役人にこの話をしますと、役人は笑いだしてそれは賃借子（哀れな親子を演じるため、駄賃を払って幼児を借りること）詐欺だと教え、お上（かみ）が取り調べてやる、すぐ訴状を出せと命じます。ところが瓢水はあわてて手を振って、「いえ、私も貧乏になっただらその手を使います。物乞いの便法を教えてくださいました」と断ったと伝えます。

正徳1年（1711）瓢水27歳のとき、祖父清春は放埒（わがままで身持ちの悪いこと）きわまりないドラ孫に、無念の涙をこぼしながら88歳の生涯を閉じます。こうなるともう誰も瓢水をとがめる者はいない。ますます遊興にふけり、先祖伝来の財産を湯水のように使います。いや、瓢水だけではない。祖父がいなくなるとあんなに忠実だった番頭どもが頭の黒いねずみになり、叶屋の経営もしたいほうだい。めいめい勝手に利益を横領するようになります。おまけに3年後暴風雨のため持ち船が難破、さしもの叶屋も少しずつ軒が傾いていきました。

享保18年（1733）7月、優しすぎた母お参が死亡します。叶屋はとくに倒産しており、大きな家屋・敷地も人手に渡ってしまい、お参はたった一つ残った土蔵のなかで、ひとりで暮らしていました。放浪中の瓢水は風のたよりに母の死を知り、さすがにとんで帰りますが、葬儀はすでに終わっており、昔、叶屋に世話になった老人たちが設けた小さな墓で眠っているだけでした。どんなに無理を言ってもおろしながら聞いてくれた母親に、息子はなにをしてあげたのでしょうか。

「食うもんはわしらがかゆを運んでやるだけやった」「寒い夜やのに炭も湯もない。横にもならず震えてはった」「だいたいお前さんが悪い。今までなにしてた」「この親不孝者め。叶屋つぶして平気かいな」と善良な年寄りたちに口々に責められた瓢水が、墓前にひざまづいて詠んだ一句があつた有名な、

「さればとて石にふとんも着せられず」

です。親不孝な道楽者の悔恨（かいこん）の情（過ちをくやみ残念に思う気持ち）を、わざと悪ぶざけをして茶化しているだけに、胸にしみるものがあります。